

奥村土牛

明治二十二年（一八八九）、東京生、本名義三。明治三十八年、梶田半古に入門し、塾頭だった小林古径に多く指導を受けた。同四十年、東京勸業博覧会に「淳盛」が入選、大正六年に土牛と号し、昭和期に入って以後は院展を中心に出品、受賞を重ね、東京美術学校（現東京芸術大学）、帝国美術学校（現武蔵野美術大学）、女子美術大学で後進の指導にも当たった。昭和三十七年、文化功労者となり、文化勲章を受章。日本美術院に尽力し、昭和五十三年には理事長となった。平成二年没。

土牛の作品は、美しい色面を主にして画面を構成、表現していく独特な手法を主体として、新しい日本画にさらに新鮮さを深めた。自伝『牛のあゆみ』の題名が示すように、土牛は、最初から、常にこつこつと絶えざる歩みによって前進して自らの画風を創り上げたが、「私はデッサンしている時間が一番楽しい」と語るように、その基本は写生にあった。土牛は、彼が昭和五十三年に宮殿装飾用の「富士」を完成して納め、日本美術院理事となったこの年から数年にわたって、香淳皇后と写生を通しての交流があったようである。この年、土牛はすでに八十九歳の高齢であったが、その数年前から素描展のほか、各展覧会に出品を続け、なおも意欲的な活躍をしている。この頃、香淳皇后は、前年に腰椎を痛められたこともあって、絵の御制作はあまり行われなくなっていた。そうした中で御覧になった土牛の見事な素描は、香淳皇后の絵の御制作意欲を、少なからず駆り立てたことであろう。昭和五十三年の香淳皇后の御絵「須崎にてーはやとより」（展示番号62）は、以前の御作に較べれば力強さに欠けるものであるが、体調を崩された香淳皇后が、一筆ずつ丁寧に、写生を楽しまれた作品であり、土牛の影響がうかがえる。

93

山中湖より

昭和53年

「画中に「五十三年二月 山中湖」とある。宮殿装飾画「富士」制作のためのデッサンの一枚と考えられる。」

- ・各展覧会図録中，作品名や作者，制作年などの表記は，図録発行当時のものです。
- ・三の丸尚蔵館の展覧会図録の著作権はすべて宮内庁に属し，本ファイルを改変，再配布するなどの行為は有償・無償を問わずできません。
- ・三の丸尚蔵館の展覧会図録（PDF ファイル）に掲載された文章や図版を利用する場合は，書籍と同様に¹出典を明記してください。また，図版を出版・放送・ウェブサイト・研究資料などに使用する場合は，宮内庁ホームページに記載している「三の丸尚蔵館収蔵作品等の写真使用について」のとおり手続きを行ってください。なお，図版を営利目的の販売品や広告，また個人的な目的等で使用することはできません。

香淳皇后の御絵と画伯たち

三の丸尚蔵館展覧会図録 No. 43

編集 宮内庁三の丸尚蔵館

制作 株式会社東京美術

翻訳 横溝廣子

発行 宮内庁

平成十九年三月二十七日発行

©2007, The Museum of the Imperial Collections